（1988年6月18日第三種郵便物認可）

月刊 反トマホーク通信

No. 35
88. 9. 20
定価 100円

〒150 東京都渋谷区渋谷2-5-9 パル青山502 トマ喰い虫社 ☎03(498)6095
044(63)5101

「韓半島の平和と統一のための世界大会および汎民族大会」（8．22～28 ソウル）会場の高麗大学学生会館前の大横断幕

●母港をくつがえす運動を！ （編集部）

核戦争と軍事介入／二つの貴重な手がかり

●入港してしまったから終わりではなくて （横須賀）

●平和船団たいけん記　各地から…広島・呉／京都／佐世保

トマホークの配備を許すな！全国運動

●維持会員（月間会費）	●参加会員（月間会費）	●通信会員
団体　1口　2000円	団体　1口　1000円	年間
個人　1口　1000円	個人　1口　500円	2000円

会費は本誌購読料を含みます

あなたも仲間に！

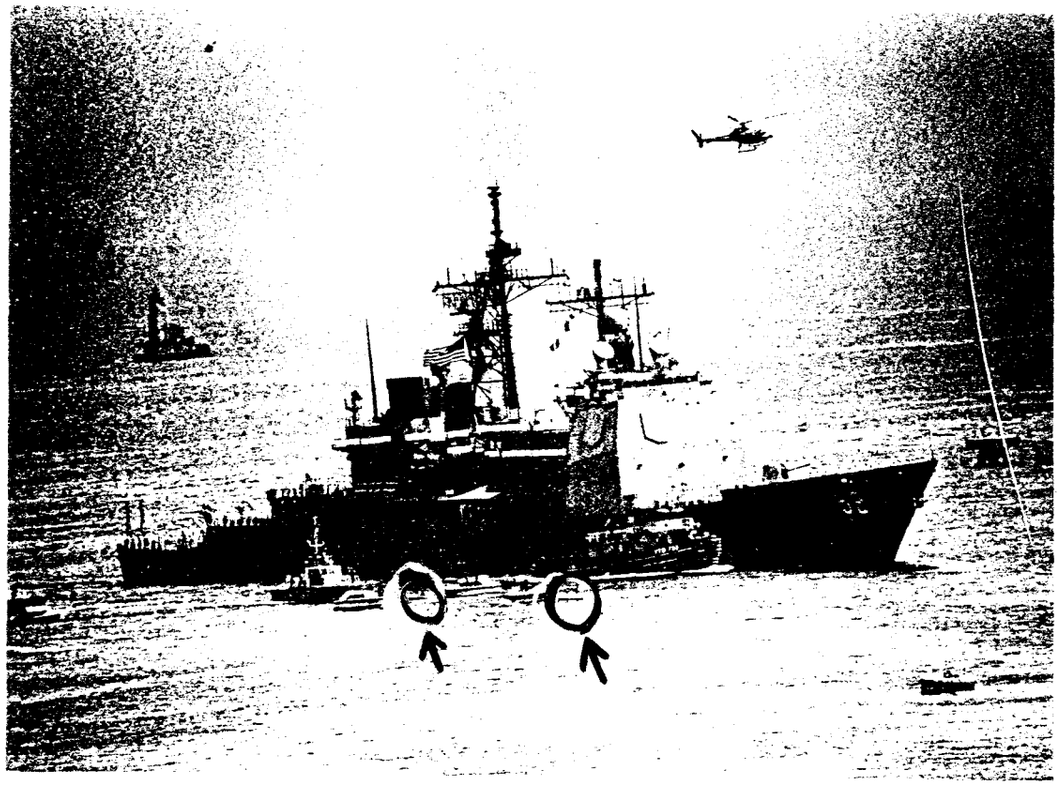
母港をくつがえす運動を！

田巻一彦
（編集部）

核戦争と軍事介入のリンケージ

九月二十一日午前十時、バンカーヒルは日本海にむかって横須賀を出港していった。十九日に佐世保を出港した空母ミッドウェーと合流して「オリンピック警備」という名の軍事行動に参加するためである。その一時間後、今度はイージス艦アンティータムが横須賀に姿をあらわした。タイコンデロガ級、ＶＬＳ（垂直発射装置）搭載。バンカーヒルとまったく同じ型の核疑惑度一〇〇％艦である。この日はもう一隻のトマホーク艦、ロサンゼルス級原潜オリンピアも入港した。ファイフは六号バースの岸壁から動いていない（二十四日現在）。

ファイフとバンカーヒルの母港化がトマホークの「常駐化」であるという事実を私たちはまざまざと見せつけられている。ヨーロッパからのニュースがＩＮＦ（中距離核）の撤去、解体作業が進んでいることを伝えている。その同じ時間帯に、私たちの枕元には新たな海洋ＩＮＦがすえつけられたのである。やりきれない気持ちになる。



朝もやのなか、警備艇に守られて横須賀港に入るバンカーヒル。平和船団のゴムボートが迫り抗議行動（○印の中に二隻のゴムボートがいるのだ）。

同時に私たちが目の当りにしているのは「母港化」の持つもう一つの顔だ。それは軍事介入である。アジア、第三世界の人々の民主化と解放、自立の闘いを海から威圧する、アメリカ海軍がトマホークを手にする前から果たしていた役割を飛躍的にアップするためにも、ファイフとバンカーヒルは横須賀を母港としなければならなかった。

バンカーヒルは何のために横須賀を発ったのか。

ソウル・オリンピックが本当に「平和の祭典」の名に値するものであるなら、その「安全を守るために」、どうしてこのような戦争まがいの軍事行動が必要なのだろうか。何と米軍は艦船三〇隻、航空機三〇〇機を朝鮮半島周辺に投入しているのだ。

一体、世界中の誰が「北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）が戦争をしかけてオリンピックを妨害する」などと本気で信じているのだろうか。はっきりしていること。それは、当の韓国の人々が、決してこのオリンピックをモロ手を上げて賛成しているわけではない、ということだ。いやそれどころか、朝鮮民主主義人民共和国を排除して強行されたオリンピックが、芽生え始めた民衆レベルの雪どけの気運を凍りつかせて、南北分断を固定化し、昨年六月以来の闘いがかちとった民主主義の空間を切り刻み、押しつぶすために、支配者側に最大限に利用されていることを、人々はよく知っている。八月に開かれた「韓国半島の平和と統一のための世界大会および汎民族大会」は、「分断オリンピック反対！」「共同オリンピックを勝ちとろう！」と高らかに訴えた。

民主化と統一を願う朝鮮半島の人々の胸元に核をつきつけるこの軍事介入・戦争挑発に、日本は頭の先から爪先まで同調している。間も無く日本海では日米共同の大演習が始まる。海上自衛隊が派遣するのは一七〇隻の艦艇、三万人の兵力など、史上最大規模。ファイフとバンカーヒルの母港化はこの国の軍国主義をも限り無く勇気づけているのだ。

バンカーヒルが横須賀を発った翌日の九月二十二日、ソウルの延世大学では「韓米日軍事訓練反対集会」が開かれた。学生達は星条旗と日の丸を燃やした。

二つの貴重な手がかり「自治体」とデイビス・レポート

対ソ核戦略と軍事介入。この二つのつなぎ目、扇の要にファイフとバンカーヒルの母港化はある。だから、問題は「核」だけにあるのではない。ましてや「核持ち込み疑惑」だけにあるのではない。

しかし、問題のありようをそのように大きくとらえたうえでなお、状況をこじ開ける鍵が「核」問題、そして「非核三原則」をめぐるせめぎあいの中にあることを、私たちは様様な行動の中で知ってきた。

第一に、自治体がこれまでよりも一歩も二歩も踏み込んだ形で政府に「異議申し立て」をした。これは注目するべきことだろう（次ページのコラム参照）。長崎市長の平和宣言に端を発し、神奈川県知事、横須賀市長、佐世保市長が次々に行った意思表明、政府への申し入れは、それぞれに濃淡強弱はあるが、「『事前協議の申し入れが無い限り核の持込みは無い』という政府の説明ではもはや住民を説得することはできない」という情勢認識を基本に、政府の「核検証」を求めるという共通点を持つものだった。神奈川県内では大和、茅ケ崎両市議会が母港化反対の意見書を、県議会が「非核三原則厳守を求める」意見書そして、入港前日には横須賀市議会が二隻の「入港見合せ」を求める意見書をそれぞれ採択した。

もちろん、自治体の動きは、歯がゆいもの

だった。次の記事で、横須賀の斉藤さんがレポートしているように、怒りといらだちばかりがつのることが多かった。しかし、国会での論議が全くといっていいほどになかった中で、国民と政府の間の最も基本的な対立点を、少なくとも理屈の上では、自治体が自らの問題として公然と口に出した、このことを真直ぐに評価することから、私たちはその先を考えたいと思う。

第二にジャクソン・デイビス博士の核事故分析とそれを携えての博士の各地での証言集会の開催は、大きな波紋を投げかけた。核艦船の母港化と起こりうる事故によって広範囲な環境にもたらされるであろう深刻な影響。その実証的な研究結果の発表は、多くの人々が核艦船の問題を自分の問題として考え、動き始めるきっかけを作った。

私たちは、「母港」をくつがえすこれからの運動を考える上で、非常に大きな手がかりを手にしているのではないだろうか。沢山の人たちと知恵をさずけあい、話し合いながらこの希望を現実の力にしたいものだと思う。

母港化は止められなかった。でも、勝負は下駄を履くまでわからない、というではないか。まだ下駄を履くのは早い。

■自治体首長の意思表示

本島長崎市長

●アメリカの艦船の日本への寄港に対して、日本政府は主体性をもって核兵器の有無を検証し、非核三原則を厳しく守る立場を鮮明にすべきである。（平和宣言より）

長洲神奈川県知事

●もはや事前協議にもとづく従来の説明だけでは、この不安と動揺を解消する説得力をもちえない状況にあり、このまま両艦の横須賀入港となることは、まことに遺憾といわざるをえません。

国におかれましては、核兵器の持ち込みが絶対になく、国是である非核三原則が厳格に守られていることを、みずからの責任において、なんらかの方法で裏づけをとって明確にされるよう貴職に強く要請いたします。

（八月二十九日宇野外務大臣への申入れ）

●本職の強い要請にもかかわらず、神奈川県民の不安と動揺を解消できる措置がとられないままに（略）横須賀入港となったことは遺憾のきわみであります。

国におかれましては、核兵器の持ち込みが絶対になく、国是である非核三原則が厳格に守られていることを、みずからの責任において、なんらかの方法で裏づけをとって明確にされるよう、重ねて要請するとともに、米国政府に対し艦船配備計画の見直しを求めるよう見直しを求めるよう、合せて強く要請いたします。

（八月三十一日　宇野外務大臣への申入れ）

横山横須賀市長

●両艦が若し仮に核付き巡航ミサイルトマホークを搭載しているものであるならば、それは、『非核三原則』の厳正な遵守を求める国是の一角『持ち込ませず』を崩すものであり（略）よって特に次の諸項が的確に行われるよう強く要請します。

一、核付き巡航ミサイル・トマホークの搭載は絶対にあってはならず、従って、このことを明確にされたい。

二、両艦による新たな、いわゆる『母港化』という事態に鑑み、日米安全保障条約第四条による『随時協議』を行われたい。

三、『非核三原則』が厳正に遵守されていることを、従来の表明以上に、より明瞭で理解しやすい方途で明らかにされたい。

（八月二十九日　外務省への申し入れ）

桟佐世保市長

●横須賀、佐世保両港はわが国における米第七艦隊の艦船配備港であり、両港をいわゆる母港とする米艦船は相互の往来もあり、横須賀への標記米艦船の配備は今後本港への出入港が充分予想されるところであります。（略）市長いたしましては、非核三原則の空洞化をおそれる市民の疑義を解消するため、下記につきよろしくご高配たまわりますようお願い申し上げます。

一、事前協議がない以上、核持ち込みはあり得ないとの従来の政府答弁には市民の間に大きな疑義があり、今回、これら両艦の長期配備に際し、さらに非核三原則の堅持を米側に申し入れると共に、国は自らの手により三原則が守られていることにつき、より明らかで理解しやすい方途を講じていただきたい。

（八月三〇日外務省への申し入れ）

入港してしまったから終りではなくて

斉藤淑子
（核トマホーク艦の横須賀母港化に反対する市民の会）

八月二十七日、ファイフ、バンカーヒルの入港を目前にして、私たちはなんとしてもこの母港をくい止めたいという必死の思いで、二度目の市長交渉に臨んだ。

前回、市民の会が核を積んでいるという証拠を具体的に提示したにもかかわらず、何の検討もしないまま問題を全て外務省（国）に預けてしまうやり方の市長と、話は決裂していた。今回は争点を少し変えて、例え核「疑惑」であっても多くの市民が不安に思っている以上、既に横須賀に向かって出港した二艦が着いてしまう前に、自治体の責任者として母港に反対する行動を起こしてほしいと要請した。しかし市長は、非核三原則の遵守を政府に求めるとくり返すだけだった。市民の会で行ったアンケートでも、そんなものはとっくに破られていると六割の人が答えているのにしらじらしい限りだ。こんな狸に期待するだけむだだったのかもしれない。

午後から市役所前で抗議の座り込みに入る。鳥肌が立つほど涼しい庁舎から一歩外へ出ると、太陽が容赦なく照りつけて、じっとしていても汗が吹き出してくる。でも、しかつめらしい議論から、自由な表現の場に移って解放された気分になる。

三十日、市議会は全会一致で「両艦の入港を見合わせる」ことを求める意見書を採択した。前日、市長は外務大臣に会って「私を信じろ」という答を持って帰ったわけだが、そのことに関して一切の質疑応答もなく五分で終了したという。この単なるセレモニーを見物に、組合動員で三〇〇人がつめかけたが、その中で一緒に座り込んでくれたのは十人た

らずだった。

夕方六時から臨海公園で集会、デモのあと横須賀中央駅前で徹夜の座り込みを始める。横断幕や旗を手に総勢五〇人が座り込むと、盾を持った機動隊その他の警備がすっとんできて正面でにらみ付けている。それをとり囲むように市民の人垣が出来る。マイクで立ち去るようにとガンガン放送し、端からごぼう抜きにかかろうとした時にE神父が語り出した。「交通のじゃまをしてるのは座り込んでいる人々ではなくてあなた方（機動隊）ではないか。核兵器の存在は命を脅かすもので、あなた方自身の問題でもある。よく考えてみてほしい。いま市民が平和のために自分の気持ちを非暴力で表現しているのを上官の命令だからといって押しつぶそうとするなら民主国家とはいえない。日本は独裁国家なのか。」

直前までの騒音が嘘のように駅前広場は静まりかえり、その場に居合わせた全ての人々が神父の言葉に聞き入っていた。少しすると、機動隊は十人、また十人と帰りだし、一時間ほどで全ていなくなった。私たちは「ヤッター！」と思わず拍手して喜びあった。仕事や家庭の都合で座り込めない人が差し入れてくれたたくさんの食べ物や飲み物を手に話がはずむが、明日に備えて十二時には横になる。コンクリートの上はやはり固くて体が痛かったが、暑くも寒くもない陽気で助かった。深夜二時頃見に来た人は、その寝しずまった様子を見て、座り込みというより三崎港のマグロみたいだと思ったらしい。

何事も無く三十一日の朝を迎える。六時、ストロング・シゲキ団長率いる平和船団のうち臨海公園からゴムボートを出す七人は、皆の激励を背に出発する。残った私たちはあと片づけをして、ビラまきをする。出勤するサラリーマンの疲れきった顔は、ロボットかあやつり人形のようでぶきみだった。何か考えたり感じたりする余裕さえないんだろうか。

八時、市役所前へ移動し、登庁してくる人にビラまきをしていると、予定より一時間も早くファイフが入港したという情報が入る。わかっていたことなのに全身の力が抜けてどうしようもない無力感におそわれる。十三万七千人の署名、請願、市長への公開質問状、八月十五日からの毎日デモ、書き出したらきりがないほどたくさんの行動が無だったのか。

十二時から二隻の入港に抗議して集会とデモが行われたが、私たちは座り込みを続け市長に面会を要求する。入れかわり立ちかわりマスコミが取材に来るが、これまでほとんど取り組んでこなかったことについて、入港当日にたった一日だけやってきて記事にする姿勢にうんざりさせられる。多くの市民は核艦船の入港に反対しているが、権力の立場にある政府、市長やそのとりまき達が認めてしまっている。座り込みや市長交渉の中で私が得た実感をマスコミは表現しようとしない。

入港してしまったから終わりではなく、核と隣あわせの生活はいやだというあたりまえの市民の気持ちをうまく横につないで、母港化を止めさせるまで続けていこうとしている。市民の会で現在とりかかっているのは継続的な意見広告と市役所への座り込みを月一回行うこと。長期間にわたってレーガンとゴルバチョフに手紙を出し、市民の非核への思いを伝えようということだ。

座り込みやデモの中で知らない人がよびかけてくれた。「がんばれよ！」の声が今も私の心の中で暖かい。

平和船団たいけん記

川崎百郎
（フリー・アルバイター）

もともと「県民運動」の抗議船に乗る予定だったのですが、船が予定通りチャーター出来なかったと聞いて、平和船団の乗員を募った時には「自分は乗るものだ」と思って志願したのです。とは言ってもボートを漕ぐなんて池か湖でしかやったことはないし、港とはいえ海ですから、今から思えば無謀な選択をしたと思います。

八月三十一日朝六時半ごろ、三隻のボートに七人が分乗して臨海公園を出発しました。案の定、自分たちの船は、他の二隻に大幅に遅れをとってしまい、同乗した人にはだいぶ負担をかけてしまいました。七時頃、海上自衛隊の軍艦の前を通った時には、艦上では号令ラッパに従い、自衛官たちが整然と機敏に行動しているのを目にしました。「片や自衛官、片や抗議船」。そう思うとやりきれないような複雑な気分になると同時に「負けてはおれんのだろうな」と思い櫂を漕ぐ腕にも力がこもった、のは良いのですが力むだけで進むことができません。そんな自分たちのボートに海上保安庁の巡視艇が立ちふさがり、わざと波を立てたりして「沖へ行かないほうがいいよ」などと忠告してきました。「国のためにがんばってるんだから、そっちも協力しろ！」思いあまってそう叫ぶと、保安庁の役人が「こっちも国のため」（国と国の言ってる中身が違うわ！）。

そんなやりとりをしているうちに、沖には核艦船が見えてきました。だんだん近付いてくる、大きい。すれちがった時、ボートは軍艦の伴走船の米兵の顔がはっきりわかる位の位置にいました。「ああ、英語が話せたら！」そんなことを考えても始まらない。なんとかジェスチャーで抗議の意思を伝えなければ！

ということで顔をしかめ、拳を振り上げました。伴走船の先頭にいた米兵は笑顔で手を振っていましたが、その他の米兵はこちらと同じ様に顔をしかめていました。「通じた！」という実感と「ついに許してしまった」という悔いが交差した一瞬でした。

帰りは、慣れない海との格闘で船酔いを起こし、他のボートから「しっかりせい！」とハッパをかけられる始末。朝、自衛隊の船を通りかかった時の元気はどこへやら。ただ印象的だったのは保安庁の役人が平和船団のボートに対し、あまり規制に積極的でなかったことです。当然、ボートがある線を出れば必ず食い止めるのですが、彼等の中に後ろめたそうな態度まで感じるのです。自分が疲れた顔で櫂を漕いでいると、「大丈夫か」と声をかけてくれたりするのです。船団の人がラウドスピーカーで「皆さんの仕事は、こんなボートを取り締まることではなくて、あの核艦船を止めることではないのか」と訴えていましたが、保安庁の巡視艇にもそれが伝わっていることが感じられました。「なだしお事件」

や過密化した東京湾の安全を考えると身につまされることだったのではないかと思います。

帰る途中、自分の漕いだボートが真直ぐに進めず、米軍の海域に入りそうになることが何回かありましたが、そのたびに巡視艇から「ここから先はだめです」と注意されました。「ここは日本なのに情無いね」と答えると、その保安庁の役人は「法律だから仕方がないんですよ」と言っていました。

自分を含めて、現在の人々は、心の中で思っていることを、自分の立場や周囲から規制されてなかなか発言したり行動できずにいることが多いのではないでしょうか。「核艦船が入ってくる」ことに恐れを抱いている人は少なくないと思います。しかし、「行動してもムダだ」とか自分を取り巻く周囲を気にして、どうしても沈黙しがちになってしまうことが多いようです。人々の心にはめられている、このような心のタガをはずすような運動が求められているのだと思います。

なんと不自由な海

「抗議船」のテン末

二隻の入港も間近のある日、横須賀の仲間のところにこんな手紙がとどいたそうです。

「ゴムボートあります。使って下さい。場所と時間を指定してくれれば、届けます」

「横須賀の海に平和船団を！」の訴えと行動が確かに一人の市民のもとに届いたのです。感激でした。

その一方で、自前の船の数が余りにも少ないことをこれほど悔しく思ったこともありませんでした。まったくテンヤワンヤの大騒ぎでした。チャーターしようにも船がないのです。いや、船はあるのですがさまざまな事情でそれが抗議行動に使えない。

●　●　●

まず横須賀市内の船会社、漁船は随分前からこういう行動に使えなくなっています。まかりならぬというお達しが「お上」から出ているようです。そこではるばる横浜から「通船」（水上タクシー）をチャーターすることになります。ところが、海運不況、荷役合理化のあおりで船の数が減っている。私たちが行ったときにはすでに「平和委員会に全部貸してしまった」という冷たい答でした。

そこで、横浜と横須賀の境の金沢八景という所にある釣り船屋さんを訪ね歩きました。やっと十軒目で貸しましょうというご主人に巡りあった時には心底「渡りに船」と思いました。ところが、それも海上保安庁が営業許可だかなんだかの、細かい、当の釣り船屋さんも知らないような規則を持ち出して、これも沈没。二十九日のことです。

知り合いの全港湾労組の人に八方手を尽くしてもらって確保出来たのが二隻、それも三十日になってのことでした。

「反トマ通信」の前号で「船を出そう！」と呼びかけて、カンパまでいただいておいてほんとに残念です。「私も乗りたい」との問い合わせにも寸前まで集合場所すらはっきりしないまま、多くの人に泣きの涙でお断りしなければなりませんでした。当日の早朝、金沢八景まで来て初めて船が出ない事を知った人も少なくありません。横浜港で船を目の前にして乗れなかった人が十人以上いました。

それには、このようなはがゆくも割り切れない事情があったことを御理解のうえお許しを。

●　●　●

それにしても、冒頭の手紙のように、小さな思いを寄せあえば船は出せる。あるいはちょっと大ぶりの船をお金を出しあって手に入れることだって本気で考えたい。自前の、文字どおりの「平和船団」、もっともっと大きくしたいと思うのであります。

（た）

広島・呉・岩国　この半年

塚原章子

（トマホークの配備を許すな呉市民の会）

トマホーク艦の配備を反対して県庁前で行われた座り込み

広島の「ピーススピリット88」実行委員会は県知事に一万二〇〇〇の署名をとどけ、ファイフ、バンカーヒルの母港化に反対するよう求めた。しかし、広島県、広島市、呉市いずれも自治体としてのアクションはまったくなかった。

市民は、力一杯抗議の行動を展開した。八月二十一日には呉市の目抜き通りと広島原爆ドーム前での座り込み、二十八日には広島ではデモ、呉では「トマホークの配備を許すな呉市民の会」のダイ・イン。呉からは約一〇〇個の風船をとばした。こんなメッセージをつけて。「呉で核事故が起これば、放射能はこの風船のようにあなたの所へも届くかもしれません。風船をひろったら会まで連絡ください」。岡山県上房郡の女性から「風船拾いました」と返事が届いた。三十一日には県庁前に座り込んで入港に抗議した。

この文章は八月二〇日頃編集部に届きました。その後のあわただしさで掲載が遅くなってしまったものです。お許し下さい。

（編集部）

全国規模のピース・スピリット88の動きに呼応し広島周辺でも独自の取り組みをと呼びかけ、計24団体で今年2月に結成した『ピース・スピリット88広島実行委員会』は北西太平洋、日本周辺を「核の海から生命の海へ」をスローガンに掲げる全国運動に協調しつつ、被爆県広島の面する瀬戸内海を「核の海から生命の海へ」と訴えて、世論作りと自治体への働きかけを中心に実に様々な活動を行なってきた。

この核艦船日本母港化阻止を目指した行動から主なものを追ってみると、まず2月、ファイフ・バンカーヒル横須賀母港化に反対せよと自治体に申し入れを行ったが、その段階では自治体側はこの問題に全く関心も知識も持たず、「なぜ横須賀市のことで広島へ来るのか。」（広島市）、「こういう問題は国の専管事項なので、政府の方針に従うより他ない。」（呉市）等と答弁し、全く市民の疑念や不安には応じようとしなかった。

3月、24団体からなる裾の広がりに期待し、着実に集めていこうと署名運動を開始。

4、5月のピース・スピリットinヒロシマ呉両集会の頃からそれまで大まかだった報道関係の取材が頻繁になり始めた。又、集会の形態も人数増だけでなく各団体からのアイディアでスピーチあり歌あり子供の朗読ありと色彩を増し、鳴物入りのデモ行進は少なか

らず人々の注目を引いたと言える。

コモンデイト横須賀行動と同じ日の呉集会は約二千人という画期的な規模。折しもラズバーン、サンプルが入港停泊中の海上自衛隊Fバース前で、集会は大きく盛り上がった。

6月、デイビス博士の「呉での核事故評価報告集会」には、根回しの苦労もさることながら、予想以上の参加者の中に革新系市議の姿も多数見られる等、核艦船への認識と生命の海を取り戻す為の世論の輪がひと回りも二回りも広がったと実感出来た。報告会を前に私達も学習会を重ねたが、マスコミがかなり綿密な取材報道に取り組んでくれたことは大きな成果だった。私達はこのデイビス報告の呉に関する頁に、独自の解説を加えたパンフ『風がはこぶプルートン』を作製出版した。一人でも多くの市民に核艦船の危険性と問題性を知らせたいと思っている。

3月から集め続けたトマホーク艦の日本母港化反対の意志表示を求める要請署名が総数1万921名に達し、さる12日、呉市・呉市議会へ届けた。市の対応は五月ラズバーン、サンプル、8月10日旗艦ブルーリッジ入港受入れ抗議の際と同様、依然として「国の専管事項だから…。」を繰り返すのみであったが議会の方では感触が異なった。議員団による旧軍港各都市への核艦船対応政策等の視察旅行の計画もあるとのことだ。これにはデイビス報告も作用しているであろう。議会から市を突き上げていく道も活用の必要があるようだ。

この半年でマスコミを大きく引きつけ、市民の関心をかなり高めることが出来たと確信している。よりきめ細かな活動により、まだまだ世論も行政も動かせる望みはある。

8月19日広島県、広島市への署名提出。筆者はファイフ・バンカーヒル8月末横須賀寄港反対緊急行動を念頭にこの原稿を書いている。横須賀母港化を目前に控えた今が最も重要な時期である。生命の海を守るために今私達がなすべき事、そしてやれる事が山積みしている。

当初コモンデイト終了時に解散予定であった当実行委は、今年中は継続していくことになっている。

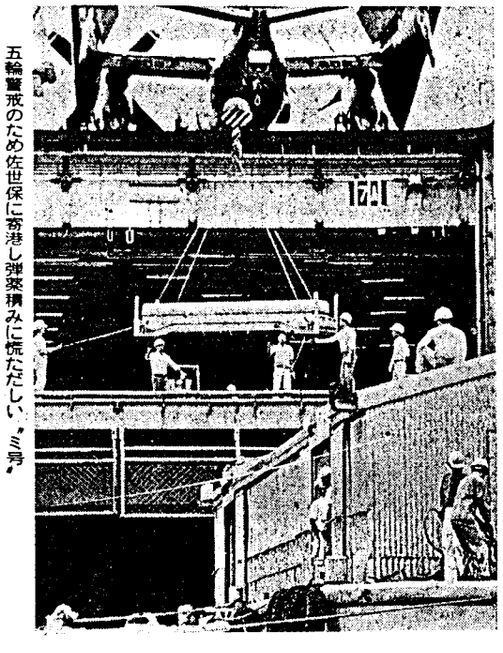
ミッドウェー、佐世保に寄港

弾薬積み込み「オリンピック警護」に

（資料提供　佐世保軍問研）

9月8日横須賀を出港した空母ミッドウェーは16日、駆逐艦オルデンドーフ、フリゲート艦カーツを伴って佐世保に入港した。入港直後から急ピッチで弾薬積み込み作業。異例の屋根付きバージ船も出現、人目をさけるように慎重に作業が進められた。通常の弾薬では見られない光景とのことである。19日早朝には出港、日本海に向かった。

地元労働団体、革新団体は抗議行動。



五輪警戒のため佐世保に寄港し弾薬積みに慌ただしい〝ミ号〟
＝16日午後・佐世保恵比須湾＝

地域に根ざして…

板倉みちえ
（トマホーク阻止京都連絡会）

トマホーク艦ファイフ・バンカーヒルの横須賀配備・母港化が目前に迫っているのに何もなしえていない私達は、まず全国運動の人たちと話し合うことから始めようと、ちょうど7月24日は厚木基地の包囲行動であることもあり、東京にでかけることにした。

横浜に着くなり、横須賀沖で海自の潜水艦と民間船が衝突したと聞いた。「え！」まさに首都圏は基地の都であると改めて感じた。

その夜、「上瀬谷基地はいらないウドの会」の方たちと交流会をもち、また次の朝、厚木基地へと1時間余りの道のりを共に歩いた。街の人に語りかけながらビラをまく母さんたちの姿から、運動が生活に根ざしたものであると肌身でかんじることができた。

地域に根をはって闘うことは大切なことである。だからこそ、全国の仲間と語り、触れ合うことを大切にしたいと思う。また一人一人の関係性なしに運動はありえないと思うからこそ東京にでかけた。

地域に根ざして闘う人々が横につながり、協力しあって初めて、反トマホークの闘いが力を持つのではないだろうか。

首都圏の人たちと出会えて、本当に良かったと思う。共に闘いましょう。

会計報告

（88.7.19 ～9.3）

［収入］

○前月からの繰越		△655,091
	経常繰越	△229,091
	借入金繰越	△426,000
○会費収入		190,000
内訳	維持団体	76,000
	維持個人	32,000
	参加団体	12,000
	参加個人	24,000
	通信会員	46,000
○カンパ収入		79,000
○在庫品売り上げ		1,640
○反核ホットライン売り上げ		39,050
＜計＞		△345,401

［支出］

●家賃（8月分）	40,000
●電話代	9,720
●郵送費	80,775
●文具費	500
●印刷費	1,000
●研究・資料費	9,000
●反核ホットライン経費	15,840
●郵便振替手数料	2,150
●借入金返済	50,000
●次月への繰越	△554,386
経常繰越	△178,386
借入金繰越	△376,000
＜計＞	△345,401

多くの方から、沢山のカンパや会費をご送金いただきました。紙面を借りて御礼申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。（事務局）

だれでもどこでもできる デイビス・レポートの広め方 ①

おかげさまで「日本の港に停泊した軍艦における核事故」――略称「デイビス・レポート」が好評のうちに売れています。アメリカの環境研究所（所長ジャクソン・デイビス博士）に研究委託した、日本で初めての軍艦上の核事故についての研究レポート。核艦船を止める際の基礎的資料として、一人一人にじっくり読んでもらいたい本です。

こういう本も、地域の図書館に購入希望を出せば、ほぼ買ってもらえることは御存じでしょうか。市民グループ発行の本ということで少し難しいかも知れませんが、「大変重要で役に立つ資料だから」と気迫で押し切ってみてください。チラシを添えるとなお効果的です。Yさんはこの手で、東京の日比谷・中央両図書館にレポートを購入させることに成功しました。参考までに購入希望カードの記入例をあげておきます。（下図）

チラシ等の普及グッズは、お申し込みになれば、すぐお送りします。その他、お問い合わせ・ご注文は、

〒150 東京都渋谷区渋谷2－5－9 パル青山502 核事故をアセスメントする会（03－498－6095）

へどうぞ。

なお購入させることのできた「成功例」もお知らせください。

第十回 反トマホーク運動全国会議のご案内

十一月四日（金）夜～六日（日）正午 東京都内（未定）

詳しくは追ってお知らせします。予定だけ、あけておいて下さい。

〔予約カード〕
（購入希望の場合は※欄も記入してください。）

どちらかに○を　予約・購入

目録カード左下番号

書名（ふりがな）日本の港に停泊した軍艦における核事故

著者名 ジャクソン・デイビス

出版社ではなく市民グループであることをはっきりさせること！

※出版社 核事故をアセスメントする会　※出版年 1988年　※定価 3000円

氏名（ふりがな）桜林宏

電話（午後5時までに連絡できるところ。又は住所）自宅・勤務先 03－456－7890

月　日以降不要

備考

登録番号 00□□□□□－□

受付　返却　先約有　不明　連絡　本人伝言ハガキ　貸出　取消

月刊反トマホーク通信 No 35

一九八八年九月二〇日発行

＊発行 トマホークの配備を許すな全国運動

〒一五〇東京都渋谷区渋谷二－五－九パル青山五〇二 トマ喰い虫社

☎〇三（四九八）六〇九五
〇四四（六三）五一〇一

＊編集 反トマホーク通信編集委員会

＊定価 一〇〇円（通信会員年間二〇〇〇円）